

# 物語が生きる力を育てる

2014年6月26日

脇 明子

## 1) 「親子読書」を意味のあるものにするために

小学生になったら、絵本から物語への移行を

「なぜ読書が必要なのか」をしっかりとつかんでおこう

## 2) メディアはなぜ子どもの発達を脅かすのか

赤ちゃんがスマホに見入るわけ

おもしろいからではなく、危険かもしれないから、情報量が多そうだから

映像メディア、電子メディアは、赤ちゃんの発達を脅かす

人とのかかわりを妨げる

視覚と聴覚以外の発達を妨げる

経験によって学習することを妨げる

子どもが、アニメ、ゲーム、ネットにのめりこむわけ

現実ではなかなか味わえない、強い興奮や万能感が味わえる

そのぶん現実にすべきことがおろそかになり、前頭葉の働きも鈍るので、現実世界での居心地が悪くなり、ますます映像の世界にのめりこむ

それが悪循環を引き起し、依存症に

依存症が進行すると、おなじ刺激では満足できなくなり、より強い刺激を求めるようになる

メディア依存の危険

年齢相応の発達ができず、人間関係も希薄になり、社会的孤立へ

やがてはどんな刺激でも満足できなくなり、刺激飢餓で苦しむことに

その苦しみが家庭内暴力に

## 3) 読書と、映像メディア、電子メディアはどうちがうか

現実体験の時間を奪うという点ではおなじ

「なんでもいいから読みなさい」ではない

「なぞ」や「ひみつ」に引っ張られての速読では、マイナスの方が大きい

成長発達を助けてくれるような本でなければ、プラスにはならない

## 4) 読書にはどんな「よさ」があるのか

知識を得ることが目的なら、ネットでもいい

物語を楽しむことが目的なら、映像でいい

目的は知識や楽しみでも、読書には+ $\alpha$ の効果がある

## 5) 本を読むとき、頭はどう働くのか

最初は情報が整理できず、頭にはまらない

主人公に好意が持てれば、読むのが次第に楽になる

読むのが楽になる=記憶力、思考力、想像力がフル回転している状態

「それまでに読んだこと」が、自分の体験の記憶に近いものに

そこまで行けば、楽しんで読むだけで記憶力、思考力、想像力が鍛えられる

これが読書の+ $\alpha$ の第一

## 6) 読書から得られる+ $\alpha$ の第二は、自己認識力（メタ認知能力）

好意から、共感へ、感情移入へのレベルアップ

想像力がリアルに働く段階になってこそ、感情移入が可能に

昔話では感情移入はまではいかない

感情移入しながら、保護者のような目でも読むことで、「メタ認知能力」が育つ

『ゆうかなな女の子ラモーナ』『影との戦い』

メディア漬けではこの力は育たない

## 7) 優れた児童文学が与えてくれる大切な三つの体験

### 1. いまでは味わいにくい豊かな生活体験

「エーミル」シリーズ、『小さい牛追い』『牛追いの冬』

『大きな森の小さな家』『農場の少年』など

### 2. 豊かな言葉体験を含む、人間関係の体験

家族や友だちとの会話だけでなく、ふつうは敷居が高い相手との対話も

『不思議の国のアリス』『小公子』『点子ちゃんとアントン』『ドリトル先生航海記』

説得、謝罪などの高度な会話も

『王への手紙』『冒険者たち』

### 3. 逆境と、それに伴う不快感情の体験

「不快感情消去マシーン」に囲まれたいまの子どもたちは、不快感情の体験不足

感情移入できる主人公と一っしょに乗り越える逆境は、とてもいい経験になり、現実の逆

境に立ち向かうときの力に

『ハイジ』『第九軍団のワシ』

## 8) 読書から得られる+αの第三は、「書き言葉」を読み書きする力

「話し言葉」と「書き言葉」のちがいは、音声か文字かのちがいではない

いまの世界で生きていくには、「書き言葉」の力が不可欠

よくできた児童文学は、「話し言葉」に近い部分に助けられつつ、「書き言葉」の世界にはいる手助けになる

おもしろくなれば、状況説明や風景描写も読める

サトクリフは風景描写を読ませる名手（『第九軍団のワシ』『運命の騎士』）

「思ったことをそのまま書け」では、書けなくて当然

その前に「書き言葉」のストックを

三年生たちが自発的に「エーミル話」を書いた例

「書き言葉」のトレーニングに最適な作品も

『あしながおじさん』

『オタバリの少年探偵たち』

## 9) どうすればそんな読書に導けるのか

絵本や昔話の段階から、物語へと進むことを意識しよう

絵本は「絵」によってではなく、「絵と文によって語られるお話」で選ぼう

『おにぎり』『ちいさなねこ』

「絵のきれいさ」「奇抜さ」「驚き」などに惑わされないこと

昔話は大切だが、それだけでは足りないことも忘れずに

語ることにこだわらず、ときには朗読でレパトリーを増やそう

絵のない物語など聞けないはずという思いこみを捨てよう

「牛の子イワン」（『ロシアの昔話』）の例

園の年長組から物語の朗読を取り入れ、小学校では物語を中心に

家庭で読み聞かせるのもいいが、クラス担任が読むのが理想的

ボランティアはその援助を

ボランティアでも、週に1回でしっかりした物語が読める

いい本を選べば、忘れる心配はない

実績のある本の例

『世界のはじまり』『白いりゅう黒いりゅう』『ちびっこカムのぼうけん』

『けんた・うさぎ』『ふたりのロッセ』『ドリトル先生航海記』『時計づくりのジョニー』

『小さな山神スズナ姫』『エーミルはいたずらっ子』『とぶ船』『ニルスのふしぎな旅』

## 『ふたごの兄弟の物語』

### 実施にあたっての注意事項

絵本とちがって「聞いていないように見える」ことも多い。

仲間が子どもたちのうしろでいっしょに聞けば、「それでもじつは聞いている」姿に気づける

お互いに気づいたことを伝えれば、朗読のスキルアップにも

「聞く姿勢」に気をつけさせたりしないほうが、想像力はよく働く  
耳で聞くだけではわかりにくい部分については、適宜、工夫を

言い換え、説明、掲示物、配布物

「好きだったところはゆっくり読む」と言った学生

「自分で読まないと力にならない」ということはない

集中力はむしろ余分に必要

速読しがちな子どもにも有益

自発的な読書にもつながる実績が

## 10) 絵本選びの注意

小学校にはいったら、絵本から物語の本へ

読み聞かせて「受ける」「反応がいい」と人気の高いものには気をつけよう

「見下す笑い」がもたらす快感は、「いじめ」の土壌を作る

「綱渡りのスリル」も、読む力にはつながらない

受け取る子どものための絵本か、画家の自己表現のための絵本かを見分けよう

「絵がきれい」「絵がおもしろい」ではなく、物語で選ぼう

メッセージが物語から浮いていては、本当には伝わらないことを忘れずに

小学生に絵本をというときには、飛び切りのものを厳選して

『このよでいちばんはやいのは』

『えぞまつ』

『野うさぎのフルー』

『蝶の目と草はらの秘密』

『いいことってどんなこと』

『ピーターのとがみ』

『時計づくりのジョニー』

『ながいながい旅』

『パパのところへ』

『ボタ山であそんだころ』